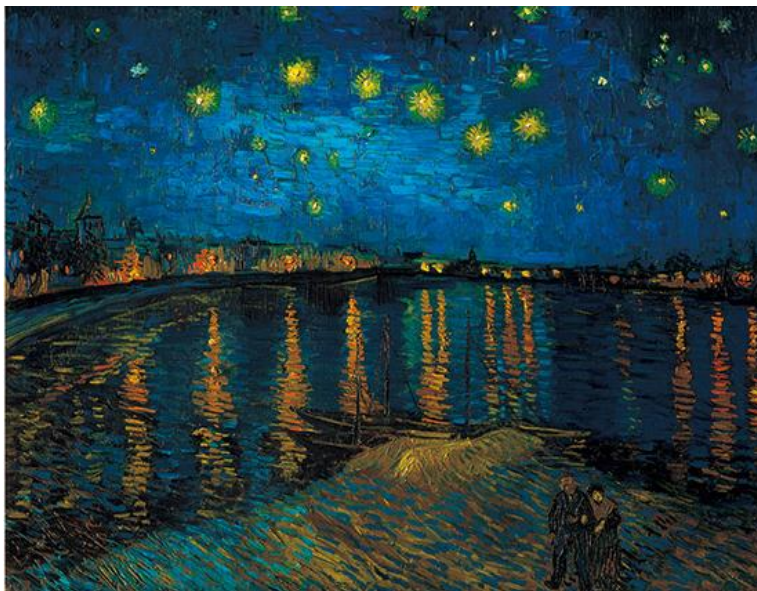


ベルクソン哲学を継承し発展させる新シリーズ

「精神のエネルギー」の探究 第1回

身体と精神のつながりについて



ゴッホ (1853-1890) 「ローヌ川の星降る夜」 1888年

2017-4-19

野口幹夫

精神のエネルギーの探究の

新シリーズ第1回 身体と精神のつながり

目次

新シリーズ全体の前置き

第1章 人間は身体と精神の関係をどう考えてきたか；身心二元論の歴史

第2章 脳とダークマター 最近の科学的究明

2-1 脳のイメージング

2-2 ゲノム脳科学

2-3 ダークマター仮説の進展

第3章 肉体と精神の相反

3-1 肉体からの精神の独立

3-2 肉体の統治機構としての脳の落とし穴

3-3 脳がアルツハイマーで健全な精神

第4章 肉体と自分自身が分離した例 脳震盪

第5章 まとめ：肉体と精神の関係の仮説

新シリーズ「精神のエネルギー」の探究 全体の前置き

ベルグソンの哲学がうちだした重要な方向は「人間は今後も進化する」との予測である。彼は生命の進化を研究し、人間の精神こそは生命の進化の先端にあるとした。今は再び停滞しているが、やがてそれを打ち破って新たな段階を迎えるであろうと述べ、それは人間精神の霊的進化であるとした。

霊的進化とは何か。私流の敷衍をくわえて言うと、人間の精神すなわち魂は、身体に宿っている間にある程度成熟するが、限界がありやがて肉体の死によって、肉体の桎梏を離れて自由になった時、精神（魂）はその後本格的に開花成熟し、限りなく神的存在に近づいていく。その道があることを多くの人間は未熟な間でも漠然と知り、それを目指している。それは不思議なことだが、それが人間精神の偉大なところだ。今はほとんど知られていないその過程を、人類が知るようになった時、人類は新たな進化を遂げるのである。その知恵を与えてくれる精神科学の進展を切望しつつベルクソンは亡くなった。私はベルグソン紹介第5回「精神のエネルギーを読む」（2016年）でこれをまとめて報告した。私はこれまで学んできたベルクソン哲学を紹介し普及させるだけでなく、ささやかながらその哲学を継承し発展させたいと願っている。継承発展させるということは、ベルクソンの思想哲学に、彼以降の人間が獲得した知恵や科学（物理学・生命科学など）の進展を外挿させていくことであり、その証拠を集め、間接指示法も使って、より確からしさを判然とさせる努力をすることだ。

（今はその研究手法も見いだせていないが、存在だけは知ることになったダークマターを分析計測する科学が今後の数世紀後に発展したとき、その科学が精神（魂）の存在を発見することであろうが、それが見えない現在は、間接指示法によって接近するほかない。それは、問題解明につながりそうなくつもの確かな個別事例を調べ、その寄って来たる原因を推論し、その延長線を外挿していく。それらの線が交わるところに、いまはまだ見えていない真実の存在を探し当てることができるという方法だ。ベルクソンは科学的に未知な間この方法しかないとしてそれを使って重要な推論を生み出している。）

私は残りの余生を、特にこの80歳代の時間を、それにささげたい。新シリーズ「精神のエネルギー」の探究を次のようなテーマにわけて調べていくことで段階的な接近していきたいと考えている。

2017年の第1回は総論的に 身心二元論と、身体と精神のつながりを取り上げる。以降、「心の病」「気」「気の芸術 能」や、「精神が神に近づく道」「祈り」「肉体の卒業と精神の飛躍の道」などのテーマを予定している。

精神のエネルギーの探究の

新シリーズ 第1回 身体と精神のつながり

第1章、人間は身体と精神の関係をどう考えてきたか；身心二元論の歴史

肉体と精神は、人間という同じ枠組みのなかにあり、そのつながりは一見分かちがたく見えるが、成り立ちや役割はもとより、元素構成も全く違う別な存在であると考えるのが身心二元論だ。現代人のほとんどは、そのようなことは科学的に実証できないからありえないと否定するのだが、実は二元論こそ長い人類の通説であった。

紀元前4世紀の古代ギリシャの哲学者プラトンは、著作『パイドン』の中で、死はソーマ（肉体）からのプシュケー（いのち、心、靈魂）の分離であり、そして分離したプシュケーは永遠に不滅であるとした。不滅であることのひとつの理由として、プシュケーは部分を持たない、とした。つまり何かを破壊するためにはそれを部分に分けなければならないが、プシュケーには部分がないのだからそれは分けることができない、すなわち破壊不可能である、と論じた。魂が死後身体から脱け出るという思想は、洋の東西を問わず信じられていた。エジプトのミイラ作り、チベットの死者の書、日本の浄土信仰など、すべてに共通している素朴な身心二元論だ。

近代哲学者で二元論を唱えたのはデカルトで、それをカントが論破したから哲学的にも二元論は清算されたと思っている人も多い。しかしこれから詳しく述べるようにカントの反論も決してそれを否定したわけではない。その論争を詳しく見ていきたい。

まずルネ・デカルトは17世紀の半ばまで生きた人だ。その哲学書「方法序説」（注1）によれば、彼はフランス貴族の子として生まれ、申し分のない境遇の中で当時の先端学問を学んだ。しかしそこで学んだ学問は真理とは遠いとの疑問を持って、学校を離れ、旅行と兵役の経験をつみ、思索を重ねて、真理の探究に最も基本的なところに立ち返ろうとした。その結果彼は人間だれにも平等に与えられている理性だけを武器にして、理性が疑うものは受け入れない。すべての疑いのあるものを捨てていって何が残るのか考えた。

するとすべてを偽と考える間も、そう考えているこの私は必然的に何ものかでなければならぬと気が付いた。「私は考える、ゆえに私は存在する（Cogito ergo sum）」ということだ。これは真理だ。どんな懐疑論者にも揺るがし得ないものだ。これを哲学の第1原理とするとした。

<ここからデカルトの直観的な飛躍が始まる。>考えることをやめたら存在もなくな

るので、それはいかなる物質にも依存しない。その魂は認識できることには限界があり完全ではないと自ら承知している。それは完全なものがあると知っているからだ。完全を意味するものそれは人間に理性を与えた神であるといい、神をも一気に証明してしまった。引き続いてこの小著で、人体がいかに精巧に作られているかを、特に循環系の解剖学の知識をもって具体的に解説し、身体はそれぞれの目的を持った部分を組み合わさって出来た精巧な機械であると述べる。それに神は生気を吹き込み、生きるものとした。動物はここまで終わるが、人間にはその上に神は理性とそれを働かす魂を分け与えた。魂は死する理由がないので不滅である。これがデカルトの二元論の要約だ。このようにデカルトの出発点は、すべての人間に与えられている「理性」である。

カントはそれを批判した。題して「純粋理性批判」(注2)である。彼はその序言でこう述べている。人間の理性は蒙昧と矛盾に悩んでいる。理性そのものを問わざるを得ない。すなわちここに理性を自らの法則によって裁く法廷を開設する。その法廷が「純粋理性批判」だ。と。

彼は認識を分解し感性と悟性と理性の3段階からなると分析した。五官の働きで外界を受けとめる感性、その印象をまとめ上げる悟性、その認識から直接は知りえない世界の総体を推論するのが理性であるとして、その各々に形式や限界を観念論的に詳細に論じた。そして最も重要な論点は、表題が示す通り「理性の限界」についてである。理性は、悟性で認識した対象をまとめ上げて、推論を加え世界の全体像を思い描く能力だ。人間の理性は常に拡張して完全性を求めていく本性を持っている。しかしそのために誤謬推理や逸脱的推論を生み出すのだ。誤謬推理としてあげられるのが、デカルトの「われ思う故に我あり」や、靈魂の不死論を取り上げ、「主観として在る」ことが、客観的な存在であると証明したことにはならないと述べる。

重要なのはその先だ。理性が答えを求めるテーマは、人間とは、そして魂とは何か、世界宇宙はどうなっているのか、そしてそれを律する究極の存在(すなわち神)はあるのかという三つであるが、歴史上の学者がそれぞれの答えを出してきた。たとえば身心二元論や魂の不滅、世界の統一者としての神の存在などだ。しかしこれらをすべて否定する説も理性的には成り立つ。つまりこれらの究極的な問いには人間理性は答えを出せないのだとカントは述べているのだ。何が正しいのかではなく、問いそのものが誤っているのだというのだ。これらの究極的な問いに理性が正否の答を出そうとすることが誤りであって、人間はこの問いを持ったまま、人間の行動にどう結び付けていくかが課題だと述べるのである。純粋理性批判から実践理性への転換を求めるのである。

カントの議論は煩雑でついていくのは困難を極めるが、筋を見れば至極当然なことを言っている。身心二元論を正しいとか誤りとか言っても始まらない、それをどう考えて人間の生き方に活かしていくのが問われるとっているのだ。

デカルトの二元論の組み立ては、先に見たように論理の飛躍がありすぎる。おそらく当時もまたこれまでも、二元論が常識であって、すべての先入観を捨てる態度を取っても、それは当然のことなので、新たな論証をする必要はないと見ていたのに違いない。デカルトは、まだ中世の科学に生きており、ガリレオの地動説への異端審問におびえ自説の発表もためらっていた時代だ。一方カントが純粹理性批判を書いたのは 1781 年。近代物理学はすでに幕が上がっていた時代だ。教会神学への懐疑から理神論やフリーメーソンが大活躍していた。

デカルトの時代までは、人間は自信も持って信じていた身心二元論を、カントはまずそれは証明できないものと烙印を押した。その後の現代科学技術の時代には、迷信として追放されてしまった。

しかしカントの誤りは、理性では人類が求める究極の答え出せないと言い切ってしまったことにあると思う。いま科学が承認しないことは存在しないといっている科学信奉者と同じあやまりをおかしているのだ。人類というのは、たとえ今はわからなくとも、科学として答えはある筈と考えてあきらめることなく、永遠に追い続けていつかは答えを出せるという可能性を見なかったことだ。

その可能性を信じた哲学者ベルクソンは、それまでの近代科学を踏まえて、新たな身心二元論を確立したのである。

我々の身近な世代間の信念をふり返ってみても、5代前の先祖はたぶん信心深い生活をしていたが、少なくとも祖父の時代から始まり、父母の時代そして我々親子の時代までの 200 年近くは目覚ましい進歩を遂げた科学技術の世の中に眩惑してしまって、科学が証明しない神や魂は存在しないと考え、実利経済一方で生きてきた世代だ。

しかし孫の時代は変わりそうだ。史上最高の興行成績を上げたアニメ映画「君の名は」は、隠れた身心二元論を踏まえていて、若い世代に素直に受け入れられている。彼らは物理科学がわずか 4% の物質しか知っていない限界も知り、また原子力利用の無用さから巨大技術への信仰的信念をなくしている世代だ。人間はすこしづつ、しかし着実に変わっていくであろう。

注 1) デカルト方法序説 谷川多佳子訳 岩波文庫 1997/7 初版 2016/6/6 第 32 刷

注 2) カント全集 4 純粹理性批判 有福孝岳訳 (2001/7/27 岩波書店)

第2章 脳とダークマター最近の科学的究明

ベルグソンは、当時の医学の知見に基づいて、人間の脳は身体が生きるための情報交換スイッチ機構でしかないとし、精神と記憶は脳とは別な存在だとした。ベルグソンの時代（20世紀の前半）から、大きく進歩したのは脳に関するイメージング技術と遺伝子の生物分子科学であり、また物理の世界ではダークマターの発見である。ベルクソン哲学の発展継承のためには必須であるこれらの分野の最新の知見をレビューしておこう。

2-1 脳のイメージング

1980年代に人間の脳を生きた状態で観察ができる装置、磁気共鳴映像装置（MRI）ポジトロン断層装置（PET）が実用化された。MRIは水の中の水素原子Hに、外からの強力な磁場をかけて磁化しその動きを検出する。PETは自然には存在しない核崩壊を起こす指示薬を注入してその崩壊を検出するという高度な原理と技術によっている。

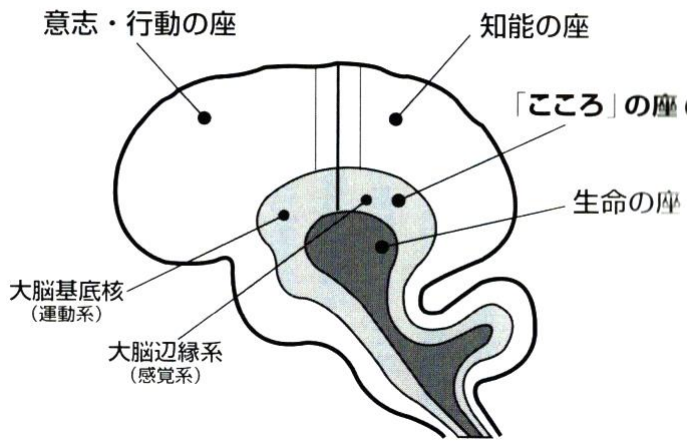
このイメージング装置を使ってアルツハイマーの研究をしてきた東北大松沢大樹教授が「こころのコアがわかった」というセンセーショナルな題の本を出された。（注3）

彼は、アルツハイマー患者の脳のPETやMRI画像診断を重ねて発見したことは異常を起こしているのは大脳の連合野だけであり、この連合野をコントロールしている別の中枢があつてそこが侵されているのではないかと考えるようになった。その結論は、アルツハイマーの疾患は大脳皮質ではなく、その下部にある「海馬」「扁桃核」「腹側線条体」といった下部神経核の崩壊が起きているということのみいだした。患者は記憶障害や、自分がどこで何をしているのかわからない見当識消失といった痴呆症状を見せる。脳の高次統御機能をマインド＝『こころ』と呼ぶとすれば、この中間層こそそれだ。これは動物にも共通している古い低次の脳である脳の間層だが、逆にこれが統御機能をもっていて、人間も持っている高次の大脳の全連合野はその支配を受けていたことを示しているのだ。

彼のいうこころのコアである脳の間層を図示した。

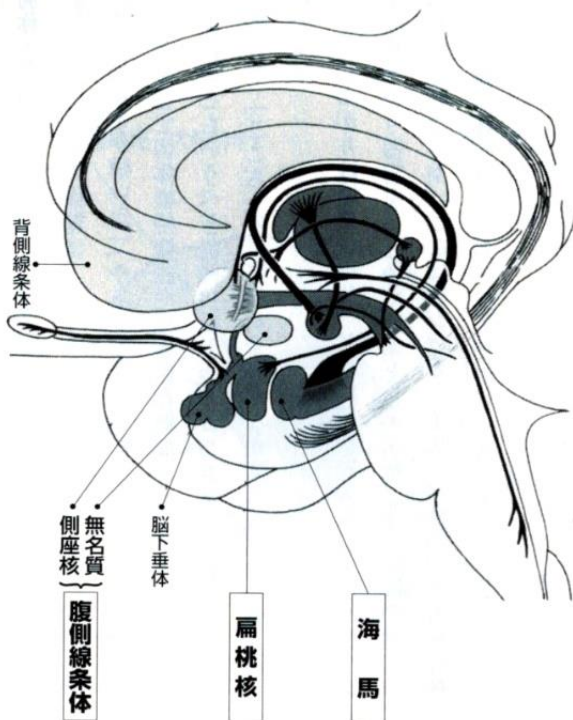
注3) こころのコアがわかった。松沢大樹著 同朋舎 1998/7

新しい三層構造の考え方



この部分を細かく見ればこのようになる。

「こころ」のコアがある、脳の間層



知識や論理は借り物で、本当の自分は感情・直観にあると心理学は教えるので、それと見合う松沢氏の生態的発見は妥当だ。

しかしこれが心のコアだといわれても、それにはいくつかの部品（扁桃核とか海馬といった部品）から成り立っていて、相互につながりそれぞれの分担機能を持っているので、どこまで行ってもこれが中枢だとは言えない。また例えこれらを合わせて「中枢」だということを仮に認めたとしても、それは動物全体に共通したものであって、人間らしさ、すなわち人間だけがもつ精神には及ぶことのない話になる。

松沢氏が心のコアと称する部品の一つで特に記憶の中枢といわれている海馬に関して、動物実験での研究が進んでいる。(注4)

マウスの脳に触針をつけて迷路実験をすると、位置と時間に関する情報を海馬が記憶することがわかる。迷路を動き回ってそれを記憶したマウスは、次にその部分に来ると、海馬に刺した触針に、活発な電位変化が起きて、記憶を確かめて行動していることが観測される。そしてその記憶は睡眠中に大脳に送られ、新たな脳細胞の配線として記憶される。つまりこの実験を通じて人間も同じ作用が起きていると推定されるので、記憶の蓄積場所がどこにあるのかという長年の謎が解けたというのだが、それはやはり動物に共通するレベルの記憶に過ぎない。原始的なゾウリムシをはじめ、すべて生き物は記憶能力を持っているので、継続的に食べ物を見つけ、いのちの危険を避けることができるのだ。「いのちとは記憶だ」とベルクソンが述べている通りだ。しかし人間の精神は、そのような生物に共通する生きるための記憶だけではない高度な精神的な記憶（逆に言えば生きるためには必要でない記憶）をも持つのである。それを示唆する事例を紹介しよう。

後で紹介するゲアリー・マーカスの著作の中で（p 59）、生まれたときに両側の海馬が損傷した女の子の症例を紹介していて、この女の子は、単語の意味を含めてかなりの程度学習や記憶は可能であったが、空間認知能力 時間認知能力 個々の事象の記憶はすべて非常に劣っていたと報告されている。上のマウスの記憶実験が示すように、これらの動物的生活に必須の空間・時間情報については彼女の不幸な海馬損傷のためできなかったのだが、言語の学習は海馬がなくてもできたのである。言語学習こそ人間にしかない精神活動の玄関口であり、それは海馬が無くてできたということは、精神活動を支える言語などの記憶は、上に紹介した海馬を介して大脳へということではない別なものだと推定できるのである。

(注4) 記憶をコントロールする、井ノ口馨著 岩波科学ライブラリー2013

2-2 ゲノム脳科学

21 世紀に入って細胞分子脳科学あるいはゲノム脳科学が進展した。この分野で活躍する科学者たちは、心は脳の活動であるとの一元論にたち、心が遺伝子によってどのように作られるのかを解き明かそうとしている。(注4)(注5)

人間のゲノムは 30 億個の塩基対から成り立っている。そのゲノムは伸ばせば 2m にもなる巻物だが、それが 46 本の染色体に分散して格納されていて、人間の 60 兆ものすべての細胞に入っている。たった一つの受精卵が途方もない回数分裂を繰り返して胎児になるのだが、今その過程がくわしくわかってきている。原則を述べれば、すべての細胞は同じなのだが、分裂を繰り返していくうちに、これは指の部分だとすれば、その位置と隣同士の細胞の関係を細胞は関知して、内蔵する遺伝子から指の形成に必要なたんぱく質を作り出し、余計な細胞は自ら死んでいくのだ。本稿に関係する脳の形成について述べれば、あの複雑な脳細胞や神経索といえども、他の部分の何ら変わりのないただの細胞なのだ。神秘的なミッションを特別な細胞なのはない。

遺伝子は親から受け継いだ特徴を持っているので、目の網膜を形作る場所に配置された細胞は、親からの遺伝子にしたがって黒い目や青い目の蛋白質を作る。同じように脳の細胞も例えば音楽家の有名な家系だったバッハの家に生まれた赤ちゃんの右脳は一般の人より大きかったかもしれない。しかしそれはあくまで目の色と同じく形や大きさなど外形的なものだ。精神的なことを含め、内容的なことは生まれてきてからの環境や努力で変わるのだ。遺伝子はすべてを決める設計図ではない。遺伝子のレシピは IF THEN 形式であって、環境や学習によって細胞とその連結の配線が発達する。その原則は体の筋肉や骨も脳も同じだ。

さまざまな認知機能を働かせるには脳の異なる部分が活動する。音楽を聴くときは右脳 言語を聞く時は左脳といった具合だ。しかしそれは脳ばかりではない。肝臓に配置された細胞が脂肪をアミノ酸に変えるという重要な機能を持っているのと変わりはない。身体のすべての細胞が特化しそれぞれの役割分担した協力システムを作り上げるのだ。

身体はすべて緊密に結びついたシステムだといわれる。どこがトリガーであってもいいが、それは一か所からではない。中心はない。持続性もない。人間脳も動物脳と基本的な差はない。つまり脳を追求する限り、動物脳と同じ原理にしか過ぎないことになる。それは精巧にできた自動機械。しかしそれを駆動するのは生きるための捕食と生殖と食われないうための逃走だけができる自動機械だ。生きる本能に基づく行動以外には 誰も

動かすものはいない。動物はそれでいいのだ。いわば本能に従って身体を動かし、生きていく。

しかし人間だけはそうではない、身体の欲していないことも精神は身体を使ってやらせるのだ。それを考えれば動物と共通するものではない別の動かす主体が必要なのだとわかる。それが発達した分子生物学でも見つからない精神に関連するシステムなのだ。

それはこれだけ科学が発達しても、精神は見つからないからそれを認めたくない脳科学者は言う。「継続した自己などない、一瞬一瞬に形成される大脳皮質のスパークそれが自己だと思うのであって、連続した人格があるというのは錯覚だ。」と。ついに人間存在の否定を宣言してしまうのだ。

(注4)「心を生み出す遺伝子」 ゲアリー・マーカス著 大隅典子訳 岩波書店 2005/3/24

(注5)「こころ」は遺伝子でどこまで決まるのか パーソナルゲノム時代の脳科学 宮川剛 NHK出版新書 2011/2/10

2-3 ダークマター仮説の進展

ベルクソンは宇宙にダークマターがあることは知らなかった。現在ダークマターとダークエネルギーを合わせて宇宙存在の96%を占めていることが宇宙観測から発見された。嚆矢は20世紀のはじめの星雲観測からだった、初めはおずおずとした発言だったが、20世紀の終わりにはそれが数量的な推定ができるようになった。そこで分かったことはこれまでほとんど完成と思われてきた人間科学はわずか4%の物質しか相手にしてこなかったということがわかったのだ。科学が一举に謙虚な立場に追い込まれたのである。

我々が接しているすべての物質は電磁氣的性質を持っている。光も究極的存在ではあるが、電磁波の一種だ。ダークマターは電磁氣的性格を持っていないので、光は出さず吸収もしないので見えず、触れても透過する。幽霊のような存在だ。これまでのすべての科学手段は何らかの電磁氣的なものであるので、電磁氣を帯びない物質の解明には「手も足も出ない」のである。欧州の巨大粒子加速器 CERN や日本のスーパーカミオカンデも所詮電磁氣的な衝突から何かを探ろうとしているが、いうなればカテゴリーミスといってもよく期待は全くできない。当面やれることはいろいろな仮説を作って理論的に攻めることしかない。

そこに最近二つの仮説が著名な物理学者から出された。一人は東大の村山斉教授で、これまでダークマターは弱い相互作用の質量物質 WIMP と名付けられてきたが彼

は、それはくっつきあうことのできる強い相互作用を持つ質量物質 SIMP ではないかとの仮説を提案した。星雲の観測から生まれた仮説だ。

今一人ハーバード大のリサランドール博士は、ダークマターは WIMP ばかりでなく約 5% は電磁気力のような土の性質を持つものから成り立ってダークな原子を作っているとの仮説を立てた。銀河円盤の厚さを説明するために生まれた仮説である。

この二つの仮説は似ている。ダークマターが、電磁物質と反応しないから、お互いも反応し合わない不活性な物質であるかのような想像を否定するものだ。それは、重要な仮説で、これで謎の物質ダークマターと一括していられていたものに対して、その中を分類する初めての仮説だ。私は人間の精神はダークマターから構成されていると考えているので、ダークマターと総称される未知の物質も、我々が知っている物質と同じく原子構造をもち数多くの原子分子を作っていると素人的に予想している。本物の科学者もそのスタートに立ってくれた。いふなればギリシャ時代のアトム説の段階ではあり、ギリシャのアトム説から 2000 年掛かってやっと原子構造が解明されたことを考えると、まだ 100 年か 200 年はかかると思っていたが、先ほどの SIM 仮説の村山教授は、今後 10 年くらいの期間にどんどん見えてくると述べている。10 年のスパンなら生きていうちにダークマターがダークではなくなり、見えない精神の構造もみえるものになってくるかもしれないという期待が出てきた。

二つの科学界の先端を見てきた。その理由は、私はベルクソンにしたがって、人間の脳はいかに精密にできていようと体のためのものであって、精神すなわちころすなわち魂は、脳の作用の中にはなく、別なものであり、それがダークマターから出来ているという仮説を持っているので、最新の科学が、それを否定するような証拠をだしているかどうかを見たかったのだ。そして否定するものは何もないことを確かめたので、度は章を改めて、その仮説を逆に証明する証言を調べていくことにしたい。

第3章 肉体と精神の相反

3-1 肉体からの精神の独立

サウナに入りながら考えた。サウナに10分以上入ると、肉体は嫌がり早く出たくなる。それを精神が強くてあと3分と我慢する。サウナを出て入る水風呂も肉体は嫌がっているが、それを強いてやらせる。精神がそれを体にいいことだと考えているからだ。

子供のころはこんなことはしなかった。ころころは体に従順だった。中学生になるころから、精神の身体への反抗期が始まる。運動部に入れば絞られると承知したうえで部活に入って、さっそくグラウンドを走ることを強いられる。はじめはコーチが怖いから走るが、そのうち苦しくとも自分を鍛えるのだからと頑張り始める。それが精神の肉体への反抗期だ。思春期頃から、少しずつ精神が身体から独立を始める。つまり精神が体に言っただけで聞かせることが出来るようになる。

身体は25歳まで成長して、その後は維持しやがて緩やかに下降するといわれている。精神は逆だ、死ぬまで成熟を続ける。ボケた老年の精神は一見下降するように見えるが、ぼけの中で人間関係の成熟を続けるとみる人も多い。

3-2 肉体の統治機構としての脳の落とし穴

デカルトは、人間の身体を機械だといった。それぞれ目的を持った部品が組み合わさってよくできた機械だといったが、現代までの医学生理学もますますそれを証明してきた。特に脳とその延長である脊髄神経系による体の統治機構は、詳しいメカニズムがわかればわかるほど驚くべきものだ。

ところがその統治機構が自動機械でありすぎて落ち込む落とし穴がある。ジョー・マーチャントの「病は気からを科学する」(注5)の著作がそれを指摘する。

身体に恐怖を感じたとき、瞬時にアドレナリンがわき上がり心臓の鼓動が早くなり、呼吸が激しくなり瞳孔が大きく開く、血液は消化器や生殖器など緊急性のない臓器を迂回して四肢や脳へと流れていく。脂質とグルコースが血液に放出されて次の動作への燃料となる。これが「闘争逃走反応」と呼ばれる。このような反応を制御しているのが交感神経系だ。この本能的な反応のお蔭で人類は生き延びられた。この時コルチゾールホルモンが放出され免疫系が活性化される。脅威が消えれば体は再びリラックスできる。しかし慢性的にストレスを感じていると、このコルチゾールスイッチが切られないまま

でいることがある。すると免疫系が暴走し自己免疫疾患を起こしてしまう。ストレスの強い人は高い血圧が血管壁を傷つけ動脈血栓から心臓発作を起こしやすくなる。心疾患から短命になる。そればかりか闘争逃走反応中はエネルギーを高めるため血糖値をあげるため、肥満と糖尿病のリスクを高める。

この厄介なストレスを解除することがなかなかできない人が多くなっている。薬剤による化学療法は神経伝達物質セロトニン濃度を高める方法だが、副作用も多い。

副作用がなく効果を上げている治癒策がマインドフル瞑想法で、今アメリカで大人気だ。これは沈思に時間をかけて精神を落ち着かせ、体に残っているストレススイッチを解除していこうとするものだ。

米国では、米軍の中東戦闘で重度の火傷を受けた兵士が次々に帰国して、厳しい治療を受けている。患者は過酷な創部ケアと理学療法を乗り越えるために、最大量のオピオイド鎮痛剤が与えられる。脳内で幸福感を起こすエンドルフィンに似た物質だ。かつては末期がんなど限定して使われていたが、これまでの鎮痛剤では効果が足りず、最も劇薬であるとされるオピオイド鎮痛剤の使用量は急増している。この薬品は脳の受容体に集中して作用するため、中毒性が強く、依存症を引き起こす。米国ではこの摂取過剰で1万5千人が亡くなるという最大の薬物汚染がおきている。これはヘロインとコカインによる死亡数よりも多い。薬品メーカーは潤っているが、社会的には鎮痛薬に頼らず激痛を緩和する方法が強く望まれている。

その有力な方法として、最新の AI 技術を使った幻想力の利用が模索されている。ワシントン大学病院で行われているバーチャルリアリティ応用実験が紹介されている。高解像度3次元ゴーグルとサラウンド音響効果ヘッドフォンを患者につけ、患者が夢中になるようなバーチャル体験場へと導き入れる。激痛を伴う治療中にこれをつけさせると、痛みの段階が2割は減少するという。受けた兵士たちはこれまで理学療法は「非常に過酷」と評していたが、この実験を伴う理学療法は「とても面白い」と評価するようになった。

著者が興味をもって調査しているものは、副作用の多い薬物に替わるオルタナティブな治療法で、すべて精神を対象とするものだ。著者自身は科学者として身心二元論は否定しているが、身体の不具合を精神への働きかけによって改善しようとするのは、身体より上位に存在する精神の力を抜きにしてはあり得ないのだ。

(注5)「病は気から」を科学するジョー・マーチャント 著 服部由美訳 講談社 2016-4-12

3-3 脳がアルツハイマーで健全な精神活動

国立長寿医療研究センター所長の柳澤勝彦さんの話を紹介したい(注6)。アメリカに長年にわたって継続されている「ナン・スタディ」というプロジェクトがある。修道女約700名の協力を得て、定期的に認知症機能テストと頭の画像診断を受け、亡くなったら解剖して神経病理学的検査がなされる。

その中の例だが、85歳で心筋梗塞で亡くなったある修道女は、修士の学位をもち、小学校教諭を21年間、高校教諭を7年勤めた後に修道院に入った方だ。驚くことに、この方は亡くなる直前まで時計を見ずに時刻を誤差4分以内で言い当てることができた。認知症ではまず見当識が障害され日時がわからなくなるのが普通だが、この人はそういう認知障害がまったくなかったのだ。ところが死後の調査でこの方の脳皮質にアルツハイマー病変があり、その進行段階は全6段階のうち最も重い「6」の極めて多数の老人斑と神経原繊維変化が観察された。この病変ならばアルツハイマー型病変がすでに最高度に進行していた筈のこの修道女は、亡くなるまで極めて高い知能生活を維持していたのだ。

この例を知って筆者の柳澤所長はこれをどう解釈すべきか悩んで人には「認知予備能」あるのではないかと思いついたと述べている。むしろ「認知予備能」が発見されたわけではなく、彼の仮説だが、「認知予備能を大きく育てるために一生楽しく学び続けること」と結んでいる。

私は脳をも支配する精神が健全であれば、アルツハイマー症も克服できるという例であると思う。

(注6) 学士会報 2016/V

第4章 肉体と自分自身が分離した例 脳震盪

「脳はすごい ある人工知能研究者の脳損傷体験記」(注7)という本がある。著者のクラーク・エリオットは若いころから多彩な才能を発揮して音楽家としても一流であったが、職業としては人工知能の分野で大学教授をしている。

彼はある時、自動車で大学に通う途中、ひどい追突をされた。その瞬間、頭はヘッドレストにあたってボールのようにはずみ、前方に投げ出された。一瞬星が見えそれから1秒ほど目の前が、真っ暗になった。意識は朦朧としていたが、やがて車を動かして路肩にとめた。警察が来て救急車がきた。しかし彼は大学での講義の時間が迫っているの

で、救急病院に行くのを強引に断ってボンネットの壊れた車を運転して大学に行き講義を行った。悲劇はそこから起きる。

日本ではこんなことは起きないだろうが、初めの救急病院を断った彼は、講義を終えた後で行った医療機関にも救急病院にも相手にされない。なぜなら彼は一見異常には見えないからだった。そのため、その後に出た脳震盪に由来するすべての症状に自分一人で耐えなければならなかった。そんな状態のまま、数年にわたって生活をし、大学の教授を務め、驚くことに2度目の離婚をして、数人の子供の養育の面倒を見た。そのような過酷な生活の中で脳震盪症の症状を克明に記される。

脳震盪症というのはミクロに見れば脳の一部が壊れてしまっているのだ。言い換えればマクロには普通の脳活動をしているようだが、脳と自分自身の連絡経路が不通になっている部分があり、脳信号は迂回しながら、経路を探しながらつながって仕事をしている。

車を運転する、洗濯をするなどの単純な仕事は正常にできる。彼は大学で人工知能の講義をきちんとやっているのだ。しかし二つの入力情報を同時に処理することや、意思決定をするなどすると、数分以内に分からなくなってしまう。脳が疲れると自分がしようとしても、そのようには身体が動かなくなるのだ。休まなければならない。

ある日の夜3時間の講義をして疲れきった彼は、歩くのに困難を感じ始め、視覚が異常になり、ついに足を出せなくなった。真夜中の誰もいない学校の駐車場で座り込んで長い休みを取り、また動きだすという動作を繰り返して、やっと車にたどり着いたら、今度は車のキーを差し込むことができない。パニックになる。休む。やっと数時間かけて家にたどり着く。

つまるところ、疲れてくると自分自身がしたいことを、自分の身体がしない状態になるのだ。その疲れは脳の疲れで、休みを取れば少しずつ回復するので、自分一人でやる仕事は時間さえかければできる。しかし人を相手にする仕事のときは、対応が待たなしになるので、相手はその状況を理解できず、その仕事も、ひどい時にはその人間関係も崩壊してしまう。

小さな機能不全が自分自身に疎外感を生み、自分はもはや人間ではないと思いつめる。かつての自分は、今はいない、追放者の世界へ入った感じ、昔の状態に戻りたい、帰るためには一度死ぬしかないと思いつめる。脳震盪症者にとって、自殺は終わりではなく、何かへの歩みなのだ。

この本の原題は「THE GHOST IN MY BRAIN」である。この THE GHOST を翻訳者は困って「自分の影」と訳しているがそれでは意味が通じない。日本人はゴーストと

いうカタカナ語からすぐゴーストバスターとか西洋幽霊と理解されるのを訳者はおそれたのに違いない。またひょっとすると訳者がこの書の本質的な理解ができていないのかもしれない。いずれにせよ誤解を避けて「影」といった訳の分からない訳語をつけたので重要な点で読者は理解できないことになるだろう。

要は脳震盪によって「自分自身が思うこと」を「自分の肉体がしないこと」という稀有な現象を克明に記録したのだ。「自分自身が思うこと」を「精神が望むこと」と書き直してもよいだろう。すると普段は精神は、自分の望む各瞬間に脳を介して身体を動かしているのが、脳震盪という強いショックのために、それが脳から乖離してしまったのだ。肉体からかい離した人間の精神を、その状態を普段の精神とは別に名をつけるなら **THE GHOST** (岩波英和辞典では靈魂 人間の靈魂;心《感情思想道義心などの宿るところ、flesh の対》とある。) すなわち「靈魂」となるのだろう。靈魂と訳したくなかった訳者の戸惑いは、日本語では死んで身体から分離した魂を靈魂という習わしがあるので、脳から乖離したといっても肉体から分離ではないので、靈魂とは訳せなかったのは理解できる。ただし日本語では、「魂」という言葉がある。「魂」は生きた人間の中で独立性の強い精神を指しているのだから、この著の **THE GHOST** に近い。

「自分自身が思うこと」すなわちそれは「魂の思うこと」であり、それに素直に従わない肉体との争いという問題なのだ。普通は分けることのできない1体のものが、脳の機械的ショックで、魂と脳が分離している状態なのだ。

彼は友人から食事に誘われたときのエピソードを書いている。きっと起きる混乱を避けるため、彼がとった態度の選択は「追随モード」に入るのだ。追随モードとは、自分の考えは一切出さず、いわれた通りにする態度で、そうすれば問題は起きないのだ。つまりこの時間、自分を追い出したのだ。言い換えれば魂のない自分の肉体となりおおせたのだ。しかし信じられない奇妙なことが起きる。友人に食事に誘われて街を歩いていた時、ある売店で「どうぞお入りください。」との看板に出会った。彼は追随モードになっているのでその看板から離れることができなくなってしまう。先に歩いていた友人は彼が来ないのでどうしたのかと戻ってきてその事態を発見した、事情を知っている友人が「これに入らない」と別な指令を出してやって、やっと看板の呪縛から解放されたのだ。

彼は後に脳震盪症の画期的な治療に出会って、脳の修復に成功する。この書の大きな部分は、その新しい治療法の紹介とその驚きの体験にあるが、それは専門的なのでここでは省略する。

いずれにせよ彼は脳の修復に成功したのだが、その時のことやっとあの懐かしい自分

の魂が何日もかけて自分に近づいてきて、ついに自分に入り込んだという感動を覚えるのである。つまりやっとう魂と肉体の合体を取り戻せたのである。

この不思議な物語は、脳震盪症というありふれた症例を、人工知能の研究者という高度な脳科学研究者の自己観察によって、人間の脳と精神、肉体と魂の関係にまで深められた稀有な書である。

すなわち脳は肉体の動作を支配していて、「魂」はその脳を支配している。したがって正常ならばここでは、脳に望みの行動を指令して、脳はそれに従って身体を動かすのである。それができるためには魂と脳は接点か界面をもっている。脳震盪によって激しく揺さぶられたために、接点の接触が不完全になってしまったのだ。そのため魂が脳を通じて身体を動かすという普通のことに時間がかかって、すぐにはできなくなる。それが嵩じたので、魂はあきらめて身を引くということが起きたのだ。生きている間は身体あつての魂だから、いうことを聞かない身体に絶望して、離れていったのであろう。その魂が再び自分に入り込むという喜びを感じたという不思議な体験の証言である。

(注7)「脳はすごい ある人工知能研究者の脳損傷体験記」クラーク・エリオット著

第5章 まとめ：肉体と精神の関係の仮説

ここまで「身体」と「精神」との関係は、普通は密接不可分であるが、現実にはそうではない様々な対応の姿を取ることを見てきた。身体は脳までを含めた肉体であつて、科学的に論じられる対象であるが、「精神」はそうではない。したがって文学的表現が多様化する。近い言葉として「心」や、「魂」があり、さらにはやや特殊であるが「靈魂」という表現もある。世界の言語でも次のような表現があるので、初めに言葉を吟味しておきたい。

日本語	心	精神	魂	靈魂
ギリシャ語	カルディア	プネウマ	プシケ	φά ν τ α σ μ α
ラテン語	cor	spiritus	anima	sanctus
英語	heart	spirit	soul	ghost
フランス語	Coeur	esprit	ame	fantôme

ドイツ語	Herz	Geist	Seele	Geist
中国語	心 XIN	(精神)	靈魂	
韓国語	마음	정신	영혼	

西欧語はギリシャ哲学やラテン神学の伝統があつて心と精神、魂と靈魂はそれぞれ独立した言葉をもっている。日本語の古語には「心」と「たま、魂」しかなかった。古語辞典によれば「魂」は肉体にやどつて「心」を生むもので、死後も存続するものと考えられていた。

「精神」という言葉は、西欧語のガイストやエスプリの訳語として使われはじめたもので明治以降の言葉である。「精神」が使い始めると古い言葉の「魂」は格下げになって人間には「精神」、知性を持たない動物には「魂」といった使われ方もしたようだが、私は魂や靈魂を古来の意味のまま、精神をうむ本体とし、とくに肉体からの独立性を強調する時に使いたい。

一方「心」は広いニュアンスを持つ言葉であるが、「精神」と対比してつかうとなれば、ここでは「心」を喜怒哀楽などの感情の意味に限定して使いたい。生理学的に見れば本稿の第2章2-1で紹介したように、喜怒哀楽の感情は、脳の縁辺部の「心のコア」で生ずる。脳は身体に付属しているので「心」も身体に付属して、生きていくための重要な機能だ。その意味では「心」は本来動物にもある。犬や猫など人間に近い動物の「心」は身近に感じるが、動物や昆虫などすべての生物にすべてに心はある。脳の研究がすすんで、生活記憶は脳の海馬と大脳にあるとされているが、動物が生きていくためには、食べられるものと、襲ってくる危険などの生活記憶がなければ生存できない。喜怒哀楽の感情もその記憶と共に、生きるための警告情報として発生する。これは人間も含めた動物に共通する「心」の作用であり、それ以上のものではない。

人間の「精神」は本質的に異なる。動物にも共通する「心」ではない。心は身体に要求に反することはしないが、精神は場合によっては身体に要求に反することを身体にさせる。「精神」という言葉は、言葉や音楽や絵画などの表現手段を得た人間だけがもちえた初めてのものとして使う。

人間の幼い段階では精神は心と区別がつかないが、人間の成熟とともに精神は精神としての特徴をもち始める。精神だけが持つ言葉、絵による表現、音楽などの表現手段を介した「精神記憶」が存在する。それは脳の中にはない。現代科学では脳を精査しても見つからない。現代の脳科学では海馬やそしてそこから大脳に蓄えられる「生活記憶」のメカニズムは発見できたが、それとは異質な「精神記憶」は、精神体の中に蓄えられていて、それは見ることができず、今は科学の研究の対象とはなしえていない。

精神は一生かけて成熟していくことが特徴であるが、成熟とともに精神を「魂」と表現する方が妥当な場合がある。さらに成熟した精神は、やがて身体から分離しうるまでになり、そのような段階の精神を「霊」または「靈魂」という。いずれも精神のことであるが、成熟して行くにしたがって別の名前と呼ばれているのである。第3、4章で上げた事例から見れば、身体と精神との関係が、一体不可分ではなく、精神が優位にたって身体を動かしている様子や、また魂がショックで脳から分離したことから起こった事例を見てきた。これらは身心二元論を証明する事例だ。

これらを踏まえて、身体と精神との関係の仮説をさらに前進させてみよう。

まず精神はダークマター分子で構成されていると仮説する。それを SA と名付けておこう。

人間の受精の際、身体の形成のためのゲノム DNA が両親から受け渡されるのと同じく、精神のゲノム XSA も受け継ぐのだ。XSA もダークマターから出来ているので、現在の技術では見えないが、すべての細胞が DNA と XSA を持っているのだ。DNA が全生物の歴史を記録していると同じように、XSA は人類が精神を持つようになってからの歴史を記録している。DNA が体を形作るように、XSA も我々の精神体 SA を形作る。その発現は、DNA が IF THEN 方式であるように、XSA も決めるのは形だけであって、それに中味を与えるのはすべての人世経験によってである。後天的な教養は、すべてこの SA の「精神記憶機構」に蓄積される。SA は「精神記憶機構」だけでなく、理性と直感的判断機能を備えているようだ。要は動物に無い人間だけの精神作用はこの精神体 SA が担っている。

精神体 SA は、脳の中核とみなされたいわゆる「心のコア」に接続しているのであろう。電気化学的接合ではなく、人類はまだよくわかっていない重力的接続であろう。脳

震盪症例から見ると強い力学的衝撃でその接続に不具合が発生するようだ。

不具合がない正常な時は、この精神体 SA が指示して、脳に作用し、脳は複雑な脳のすべての分野の神経索を連絡して、たとえば、口腔筋肉や舌と肺を連動して巧みに音に仕上げた言葉にするという複雑なことを成し遂げる。そのために大脳の何兆という脳細胞が必要なのだ。精神体の望むところに身体を運ぶこともすべて脳と脊髄を通ずる神経系が働いて、バランスを取り、足を動かすことをやっているのだ。脳はすごい！特に人間が言語を使えるようになるためには、類人猿と比べて大脳の容量が倍増したことによって、言語野や総合野といった大脳が発達したことによるのだ。

人間の身体と脳は胎児の時から幼児の時までは、精神体 SA より先に成長する。精神作用はなくとも身体と脳は成長し完成していくのだ。動物はその肉体の完成を待って終了だ。人間の体の中でのみ、そのあとに精神体 SA が生育していくのだ。脳は先行し独立しているので、時に暴走する。第4章で見たように脳が暴走して病を起こすこともある。後に成長してしかし脳を支配するようにまでなった精神体 SA は、脳をたしなめてその暴走を止めることもできるのだ。

人間の脳は忙しい。疲れてやがてボケる。ほとんど脳が活動できなくなるまで、病巣が進んだ脳を持っていても、精神が健全に活躍で来ていたということがあるのだ。それが第3章の3で示した。つまり幸いなことに脳の中には、精神はない。脳を使った身体の実現（言葉も含めて）ができなくなっても、精神は成熟を続けるのだ。精神=霊魂の SA は見えないまま、幼児を過ぎたころから成長し、死ぬまで成熟する。そして身体に死が訪れる時、静かに肉体を離れるのである。

いまはまだ人間にはダークマターを見る手段がないから、脳科学者は見えない「魂」などは無いと言い、さらにひどいことには人生一貫した自分自身の精神があるというのは、錯覚に過ぎないというのだ。

SA を構成するダークマター分子がすべて解明される数百年後には、その驚くべき姿が見えてきて、だれも疑うことのない驚異の魂の精神科学が生まれるのだ。

献呈 木村勉兄

精神のエネルギー第4回 新シリーズその2

精神と「気」そして「祈り」



1898年 横山大観 屈原

三水会 2018年4月18日

野口幹夫

目次

～「精神のエネルギー シリーズ」これまでの概要～	3
精神のエネルギー第4回新シリーズその2 精神と「気」と「祈り」	5
1 われら宇宙の子	5
1-1 ベルクソンにもどって	5
1-2 宇宙にいのちのある不思議さ	7
1-3 人間の精神の不思議さ	8
2 「気」とは何か	9
2-1 私の修めた私の修めた空勁気功	9
2-2 その修練と効果	10
2-3 上海で気功大会に参加	11
2-4 経絡と気の流れ<ツボと経路図>	13
3、「祈り」「瞑想」について	15
3-1 神との対話	17
3-2 無神論者の祈り 瞑想	17
3-3 死を迎えるものの祈り	17
3-4 念じる	18
3-5 念ずることの「気」の発生と伝播 テレパシー	19
4. エピローグ	20
参考文献	23

～「精神のエネルギー シリーズ」これまでの概要～

精神のエネルギー第1回 2016-3-16

ベルグソンの「精神のエネルギー」は、どんな時代背景で語られ、何を人類に訴えたかを紹介した。

彼が活躍した世紀（19世紀から20世紀の初頭）はかつてない規模で、また洋の東西で、天界や死者から人々への働きかけが、起きた時代であった。

それは人類が戦争と地球汚染の危機に突入する危険の知らせであり、人類の立ち直りを呼びかけたものであった。しかし人類は、その危機の担い手でもあった科学技術を唯一のものとして信奉して、その天からの呼びかけの声を聴いた人々を非科学的として排除した。

ベルグソンは、人間の精神にかかわる現象は繰り返しの無いもので、事実を数字で判断することだけを科学とする態度では、精神現象の本質を見極めることはできないと指摘した。人間の精神の知られていない能力の探究には、これまでの科学手法にはよらない方法を開発することしかないと述べた。そしてそのような精神科学・心霊研究の道が開いた人類は新たなる進化の段階に達するであろうと説いた。



精神のエネルギー第2回 2016-5-18

第1回の続きとして、ベルグソン亡き後、彼が期待した精神科学は20世紀にどのような展開をしたのかをフォローした。20世紀は科学技術と経済万能主義が精神世界をも支配しつくした時代で、心霊現象は影を潜めた。精神科学は統計に頼る実験心理学に落ち込んだ。テレパシーの実験研究は、人間の主観的意欲を抜きにした現象の追及だけが行われたが、結果は否定的になってしまった。それを克服せんとして深層心理の探究が始まり「超心理学」の分野が広がったが、西洋哲学には新鮮だったが、東洋流の精神修養から悟りの追及を採った結果に終わった。

一方日本の宗教界はどのような展開があったかを調べた。大きな影響を与えた大本教などの新神道は軍国主義のもとで弾圧されて、分流していき力を失った。戦後創価学会などの現世主義的な宗教が勢力を持った。

21世紀に近づいて科学技術・経済万能主義にほころびが見えて、ようやく人々は精神世界が天上界へひろがるとの視野をおずおずと取り戻し始めた。新興宗教にその姿がある。驚くべきことにその最先端はアニメ映画などの大衆文化芸術の分野に見られ、人々の支持を集めるようになった。

精神のエネルギー第3回 新シリーズその1 2017-4-19

「身体と精神のつながりについて」



ベルグソンは自らの哲学を受け継ぎ、新たな科学的知見でそれを発展させることを人類に求めた。及ばずながら私は、それを目指してベルグソン以降に発見された科学的知見を探り、それに基づいて新たなベルグソン哲学の開拓を進めていくシリーズを始めた。その第1回として、基本に戻り身心二元論の歴史を振り返った。意外にも二元論を積極的に

否定したという哲学的根拠は無かった。その主張はたんに人々が漠然と科学的ではないと考えているだけだった。むしろ人間の古代からの正統的哲学は二元論なのだ。

世の中で困難に直面している人間の諸現象で精神と身体が別な存在だとすれば説明できることが沢山ある。脳震盪症でその事例を紹介した。

最新の脳科学の解明で「心」の働きが脳の新皮質下部の古い脳にあることが分かった。それは動物にも共通し、肉体が生きていくために必要な感情を出発とする「心」である。疑いもなく「心」は動物にもある。しかし「精神」は人間が初めて取得したものであり、動物にはない。「精神」は「心」と違い、脳にも肉体にも属さない独立したもので時に肉体に反抗するものである。心は脳科学で迫ることができるが、精神には現代科学では解明する方法がない。

そこで精神についてそれは「ダークマター」で出来ているとの仮説を述べた。精神にも遺伝子があり、先祖から受け継ぎ、幼児を過ぎたころから徐々に成長し、子孫に精神遺伝子を受け継いでいく。そして肉体が衰えても精神は成熟を続け、やがて肉体が死を迎える時、その束縛から離れ5次元の宇宙空間に飛び出していく。

精神と「気」と「祈り」

1、われら宇宙の子

1-1 ベルクソンにもどって

いのちそのものもそうだが、その頂点にいる人間は物理的には驚異の存在だ。宇宙物理が進むにつれ、その不思議さが増すのだ。ベルクソンが主著「創造と進化 エランヴィタール」で述べた「いのちの哲学」は彼の直観であったが、現代科学でその裏付けが生まれてきたのである。彼はこのように述べた。

「生命は、宇宙の始まりから、全体として一つの中心から発して伝播していく一つの巨大な波である。」

「すべての有機的存在は、最も下等なものから最も高等なものにいたるまで、生命の最初の起原から現在に至るまで唯一の連続する波の躍動の連続である。」

生命の波は、物質の抵抗に阻まれながらそれを利用しつつ、枝分かれしながら進んだ。初めの枝分かれは植物と動物である。そしてその波の先端に精神を得た人間がいると述べた。ベルクソンのこのいのちの進化の哲学は人類が宇宙のビッグバンのことは知らない時代に打ち立てられたのだから驚く。

20世紀の宇宙物理学は宇宙の始まりにビッグバンがあったと解明したが、21世紀の宇宙科学はその先に進んで宇宙は生命に満ち溢れているというパンスペルミアなる学説を生んだ。その証拠は多く出ているが、その一例をあげると、無数にある銀河星団は、すべて光り輝くが、ところどころに、そのひかりをさえぎる黒い雲のような星雲が存在する。その光吸収特性の測定をすれば、なんと星雲は、無機物質にあらず、いのちの微粒子から生まれた有機物質から成り立っていることがわかってきた。また太陽系を駆け巡る彗星から分離して地上に落下した隕石はこれまでも数多くあるが、2011年にその一つを分析したNASAはそこから生命の証拠であるDNAの成分を発見した。

今一つの大発見は、科学自ら自分の科学信奉を根本から揺り動かしたものである。すなわちこれまでの科学が絶対と信じていた物質は、宇宙の充満するもののわずか 4%を占めるだけで、23%が未知の粒子（ダークマターと名付けられた。）そして 73%が未知のエネルギー（ダークエネルギーと名付けられた）であると。つまり我々の科学は 96%未知の世界に漂っているという発見であった。

人間の身体は少なくとも科学的にわかっている物質で成り立っている。それは炭素・酸素・窒素・鉄などの重元素から出来ているが、それらは宇宙のはじめには存在しない。ビッグバンのあとまず水素とヘリウムができてくるが、大きな原子は、宇宙が進化し、星々を生み、圧縮されやがて超新星爆発という段階で初めて生まれた。それが宇宙にばらまかれ、はるばると宇宙空間を旅して、やがて我々の身体になっているのだ。我々はまさしく「宇宙の子」である。

宇宙の子であるならば、それらの重元素より宇宙での出自が早いダークマターやダークエネルギーを、その構成素子として体に持っているとは推定するのが自然だ。ダークマターは銀河の存在する場所に偏在することが観測されている。我々は銀河の一員であるので、ダークマターとともにあるのだ。一方ダークエネルギーは宇宙に一様に存在している。ともに人間の中に存在するとみていいわけだ。

しかしそれはどこにあるのか謎だ。

私は未知の人間精神こそ、その未知のダークマターから構成されているのではないかとの仮説を、このシリーズの前回の小論で述べた。

ダークエネルギーもダークマターとともに「いのち」という不思議な存在に欠かせない重要な役割を持っている可能性がある。今回は正体不明のダークエネルギーが波動であること注目して新たな仮説を広げていきたい。

ベルクソンの言う「巨大ないのちの波」はこのダークエネルギーの波なのかもしれない。そうであればすべてのいのちの創成の元になっているいのちの波であり、植物・動物などすべてのいのちに共通するものであるはずだ。その特徴にも注目して矛盾の無い仮説としたい。

1-2 宇宙にいのちのある不思議さ

我々は宇宙の子である。しかし孤独ではない。周りにはあらゆるいのちに囲まれていることがわかった。しかしこのいのちは物理学では理解できない。ベルクソンの時代に生まれた有名な物理の法則がある、エンジンの開発にかかわる熱力学で生まれたエントロピーの法則というものだ。熱交換の効率を求めながら生み出された法則だ。ガソリンなどの良質の熱量がエンジンを動かした後、使い物にならない廃熱が放出される。そこには深い真理が含まれていた。熱力学にとどまらずにさらに普遍化されると、「秩序あるものはすべて無秩序に向かう」という法則に拡大された。すべての物理現象に適用される真理である。

それに従わないのがいのち現象だ。すべての「いのち」は単純なミドリムシであれ、クジラのように大きなものであれ、その体は精密な秩序を保っている。エントロピーの法則にしたがえば、どれほど精密な秩序であろうと動けば秩序を失い、崩壊するほかない。ところが「いのち」は生きているうちは秩序を更新していくし、そればかりか「いのち」が受け継がれた瞬間、それは自分で栄養を取り成長し新たな秩序を構築していく。エントロピーの法則に従わないのだ。著名な物理学者のシュレージンガーは困ってマイナスのエントロピー量を考えたが行き詰った。物理では、いのちはあり得ないのだ。むろん頑固な物理学者は「エントロピー説は生命にも貫徹する。なぜなら死ねば無秩序に崩壊するからだ。」という。それは論理矛盾だ。死ねば「いのち」ではなくなるからだ。

そこで現代物理学では取り扱えないダークエネルギーの登場を願わなければならない。これは不思議なエネルギーだ。ダークエネルギーは宇宙が膨張する姿を観測する中で発見されたので、その本質は斥力だとされている。すなわちダークエネルギーは反重力なのだ。ダークエネルギーは宇宙に一樣に存在している。熱力学的に存在するすべてのエネルギーはエントロピーの法則に従うが、このダークエネルギーは秩序を生み出す反エントロピーエネルギーかもしれない。先に述べたようにベルクソンが指摘した宇宙の「いのち」のほとぼしりである波動がこれなのかもしれないのだ。

しかしそれは見えないし物理計測にもかからない。それと同じように見

えないし測ることもできないが、人間が有史以前からその存在を知って、それを利用することを学んでいたものがある。人間ばかりでなくいのちの先輩である樹木にもそれが存在するという普遍性があるものだ。その不思議なもの、それは「気」である。

「気」はダークエネルギーかもしれないとある新進気鋭の科学者がつぶやいている。(注7)「気」がダークエネルギーのような普遍なものであれば、動植物すべての「いのち」にまたがっていることになる。

「気」を修練した人は巨木に掌を向ければ「気」を感じるし、修練を積んだ人は植物と会話ができるのは「気」を介してなのかもしれない。

1-3 人間の精神の不思議さ

人間はいのちの進化の最前線にたち精神を得た。人間の精神は肉体に繋がりながらも別な存在だと考えたほうが合理的だということを前回の小論で述べた。それはどんなものだろうか。その機能から想像すれば、精神の本体は、身体をはるかに凌駕する精緻なシステムである。それは私の推定だが、ダークマターを骨組みとし、ダークエネルギーで動くシステムではないだろうか。22世紀にはすこしづつ解明されてくるだろう。

精神の能力は、芸術、科学探究などすべて人間らしきをもたらしているのだが、意外な能力がもう一つある。それは「気」を使う能力をもっていることだ。「気」の本質はいまだに解明されていない未知の存在だが、それが存在することが古くから知られており、その強化の方法も知り、使いこなす方便も知っていたのだ。

一方「気」はすべてのいのちに共通している。植物や動物にも共通しているが、それらはその存在を知らない。人間も「気」を強めて健康に役立てたり、闘争力として利用できる人達は少数だが、一般の人もそれと知らずに「気」の力に接しているのかもしれない。それは元来人間だけに備わっている「祈る」という能力と、「祈り」「念ずる」ことが発揮する偉大な力に現れているかもしれない。「気」を知ることが人間の精神の何であるかを見極める有力な道につながる可能性がある。

精神の探究の第4回はこの「気」と「祈り」について考えてみたい。

2、「気」とは何か

2-1 私の修めた空勁気功

私のささやかな「気」との出会いと修練を紹介する。

① 空勁気功との出会い

1994年9月の始め、私が勤めている会社の近くの駅巣鴨を通りかかったとき、気功教室のポスターをみた。気功教室は、いまあちこちにあって、めずらしくはなかったのに、この健康のための空勁気功には妙にひきつけられた。私は当時59才、前の年に会社生活では、常務取締役から監査役になっていた。いわば第一線を退いて、人生の立て直しの時であった。2年前から腕肩の痛みが続き、針灸や指圧治療にしょっちゅう通っていた。金もかかるし、受け身で治すことに嫌気を感じていた。今なら時間はある。会社の近くでもある。ポスターにあった地図を頼りにたずねた。小さなビルの細い階段を4階まで上がったところに、1室があって、中国語の教室と共に空勁気功教室があった。小柄な今村末子先生は、驚いたことに私と同年生まれであった。しかし人生のご苦労がちがう。我々の世代は戦争という不幸な時代を共にしているが、今村先生はその時代を満州で過ごされた。私の高校の同期生の中で満州育ちはみな大人びていて敬意を抱かざるを得なかった。したがって今村先生にもまず敬意をもった。先生は中国残留されておられるうちに医学の勉強をされた。そして医療関係の仕事に従事され、実地に医学を勉強された後、気功の黄仁忠先生に弟子入され、空勁気功を会得された。空勁てなんですかと、聞いたら強い気功という意味ですと教えてもらったのが、最初だった。免疫功法のコースが始まった。

② 始めの4ヵ月で得たこと

馬歩站樁 これは何と読むの？ どんな意味？ 聞きたいことはあったが、我ながら感心するほど素直に、いわれるとおりの体形を作った。2分も経たないうちに膝が痛くなった。これを30分もやるのですか？ これはとても駄目だ。というのが第一印象であった。(なお馬歩站樁に日本語の読みはバホタントウ)

手は梯形とするだけだが、それも体が固くてぎこちなく、まずリラックスを会得する必要から始まった。それでも、毎週毎日頑張っ、4 ヶ月弱で免疫功法を一通り終わった。気がついて見ると、肩の痛みは消えていた。しかし、それが気功のせいとは確信できなかった。ちょうど治るべきときが来ていたのかも知れないとも思っていた。2 ヶ月位経った頃、先生は『気』を感じますかと聞かれた。しかし『イヤーはっきりとは感じません』と答えるほかなかったのであるから。まだ『気』のことも気功も確信していなかったのである。しかし肩の痛みは、この頃を最後として嘘のように消えたことは事実である。そればかりではない。私は土曜日日曜日の朝ジョギングをし、その前後に柔軟体操をするのが習慣だったが、その時のぼした体のあちこちにあった痛みが皆なくなったのである。毎週のように通っていた指圧所の先生には気の毒をした。彼は上顧客を一人失ったからである。いつの間にか『気』を感じはじめた。中級に入ってからかもしれない、先生の予告通り馬歩站橋を始めると、手がびりびりしはじめる。膝を折ることに秘密があるのか。こんな一風変わった姿で3分以上立つことに、何か隠されていそうだなと、思う。今村先生は膝は第2のポンプだとおっしゃる。今まで知らなかったことが一杯ありそうだ。

通い始めた頃、教室1年先輩の井上さんがよく一緒であった。70才のお年寄りだったが、いくつかの重病を乗り越えてこられた人生の達人といったひとであった。いろいろ経験を話してくれた。彼は『気』を確信していた。彼には『気』が見えるというのだ。『気』が起きているとその時薄暗がりて両手の指を付き合わせると、その間に『気』が走るの見えるそうだ。「野口さんにはまだ見えませんか」と聞かれた。あれから何年もたつが私にはまだ見えない、井上さんは亡くなられて、懐かしい思い出になった。井上さんが教えてくれたことに、もう一つ公園の老木から気を受けるということがあった。両手で、すこしすき間をあけて、木をはさみこむのである。すると、びりびりと木の気が両手に伝わるという。これはやって見るとなるほど何か感じるのである。これは何なのだ？

2-2 その修練と効果

その後も練功を続け、結局3年かけて中級の功法まで学んだ。間違いなくより健康になったと自覚した。花粉症も例年より軽くなったようだっ

た。

それ以来現在も機会を見つけて気功を実行している。毎週日曜日の教会にいてミサに参加するが、この時心をイエスに向け、かつ体はイエスに奉獻する姿を取れば、気功の基本になる馬歩站樁の姿勢になる。ほぼ30分の練功になる。幸い健康なのはそのせいかもしれないとひそかに思っている。

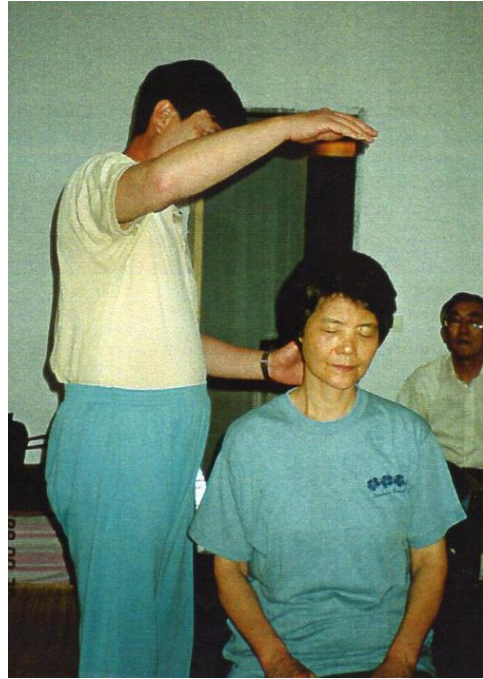
2-3 上海で気功大会に参加

この空勁気功をはじめて3年たったころ、記念大会が上海であるのに誘われて夫婦で参加した。1999年7月のことだった。この世界には新参加者だったが、日本からということで賓客として遇された。記念写真で前列左端に二人の席を与えられた。



上海市金山区というのは、空港から1時間ほど南に行った小さな田舎町だった。このあたりに日本軍は上陸し、南京を占領しに進軍していったので、この田舎の人々の記憶に生々しかった。町の食堂で年配の男が、我々が日本から来た人間と知って難詰しようと寄ってきた。話し合っただけで最後は笑顔で別れたが、そんな場所であった。

3日間の大会では世界各地からの経験の発表や実践治療などが行われた。妻は気功をやっていないので、もっぱら被験者となって奉仕した。



「空勁気功」という功法は1992年生まれの新しいもので、黄仁忠師が少林寺内勁功と天台羅漢功を総合発展させたものである。創始者の右腕である沈老師はこの大会でこの気功法の特徴を次のように解説された。

「練功を通じて、外気を内収して真気に変成する。自身の健康を助ける。また人体の潜在能力を動かす。すなわち内気を外放することができるようになり、それを自分にフィードバックして身体の調節をする。

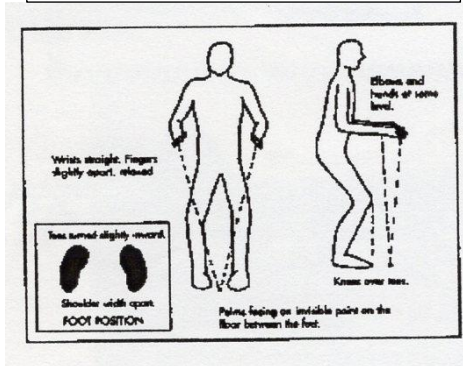
7年間の調査ではこの気功学んだ約7割の人がはっきりとした効果を感じて、効果はなかったとした人は5%だった。

伝統の気功は調心、調息、調身の三つを指導するが、空勁気功は調身に専心する。身体の形と運びを訓練するだけである。それによって調心、調息はおのずと達成するのに任せる。」

このように空勁気功は伝統の気功法から精神性を抜いているので、唯物論思想の中国共産党の受け入れが良いのかもしれない。この大会のころ毎日のように法輪功の弾圧のニュースが中国でも報じられていたが、法輪功は新興宗教としてとらえられていたのと、好対照であった。この大会は上海金山区の党の施設で行われた。その教本から引用を続けると、

「馬歩站椿は空勁気功の基礎功法である。膝を屈して、跨に座るように、腹を引き込めることを求めるのみである。踵まると下部の気血の圧力が増加し、体脈の運転を快く整える。腹を引き、肘を下げることは自然に逆腹式呼吸を形成する。

米国の気功紹介書にあった馬歩站椿のイラスト



跨に座る形は、大変重要である。跨とは腰と小腹を指すが、これらは人体の上下を繋ぐ盤であり、また腎、肝、脾、生殖器の重要な器官が分布し、さらに命門、丹田などの重要なつぼが集中して経絡の交差点でもある。跨部に座りリラックスし、長時間経過する站椿は、全身の骨格と肌身に一定の張力を保持させることによって、骨格肌身器官の効能と活動を著しく改善し、体の内気の流通を良くし、清らかなものを昇らせ、濁りを降ろす。気血を調和し、精気に

充ち、五臓六腑が良好な作用を発揮するようになる。このように站椿功の練習は病気を防ぎ、治し、強い健康な体の作用を起こす。」

「免疫功法のフィードバック療法は、空勁気功の一つの特色である。修練した内気を手掌からつぼと免疫器官へ照射する。一時停留したり、緩やかに掃くように動かす走査で行う。その目的は、自身の免疫系統を適当な状況に調整させるフィードバックを行うことである。」

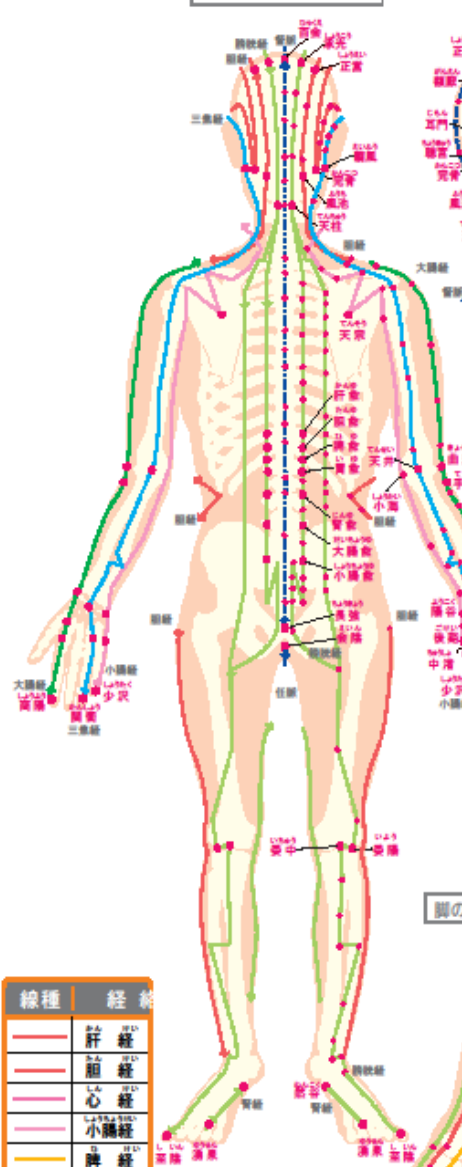
これらは言葉で理解することはむづかしい。実際指導者の形を見て、自身でやってみれば理解できるものである。練功が先決である。

2-4 経絡と気の流れ<ツボと経略図>

中国医学の基本は、全身に張りめぐらされた「経絡」の詳細な把握であり、そこに流れる「気」の流れをよどみなくさせることにある。その発見は紀元前3世紀の医学書である「黄帝内経」(こうていだいけい)にさかのぼる。それは「気」の医学である。内臓と諸器官をくまなく張り巡らせているとともに、要所にツボがある。もし「気」の流れが停滞すると身体に不調が生じるとみている。そこでツボを鍼や灸で刺激して「気」の流れを快復させると体調は回復するとみている。

ツボと経絡図

体の後面の経絡とツボ

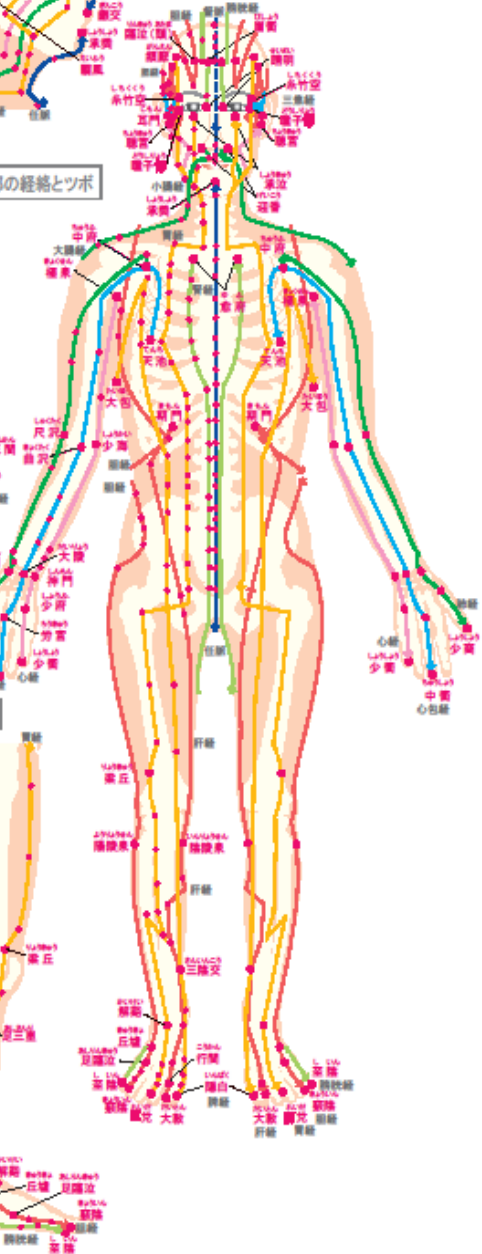


体の前面の経絡とツボ

顔・側頭部の経絡とツボ



脚の経絡とツボ



線種	経絡
赤線	肝経
オレンジ線	胆経
ピンク線	心経
薄ピンク線	小腸経
黄色線	肺経
オレンジ線	胃経
緑線	脾経
濃緑線	大腸経
薄緑線	腎経
濃薄緑線	膀胱経
青線	心包経
薄青線	三焦経
濃青線	任脈
濃濃青線	督脈

経絡の「気」の流れが血液と血管と決定的に違うのは、体内に閉じた系ではないことだ。外に解放され宇宙と直接つながっているのだ。それはツボの中に、そこから「気」が出入りする穴があるシステムになっている。特によく知られているのは老宮という掌の中心にあるツボだ。外気功としての鍛錬をすると単に「気」が出入りするだけでなく、放射される段階になる。練達の武術士が気力の遠当で相手を吹っ飛ばす。これは「気」の放射がすさまじいことを示すとともにそのエネルギーは斥力のエネルギーであることも教えてくれる。ダークエネルギーは斥力の性質を持っていることを思い出すべきだ。

ところで「気」は基本的には肉体に属している。したがって「気」を強める気功は、体の形だけの練功でできる。そこでは特に精神作用を使うことはない。しかし「気」の研究者である池上正治氏は「気功は精神と肉体を統一する。…気功の後の爽快感は人体が「気」の流れている小宇宙であることを実感する最良の方法である。」と述べている。

また中国では精神集中や瞑想で「気」を鍛錬することも行われている。

「気」は肉体と精神との橋渡し役なのかもしれない。外気に発せられる「気」は斥力であり、ダークエネルギーがその性質を持っているとすれば「気」まさにダークエネルギーである可能性が高い。

3、「祈り」「瞑想」について

人はだれでも祈る。手術を受ける子供を待つ親は無事にいのちが助かりますようにと廊下で祈る。人間は一人ではない。他者との関係のもっとも純な結びつきはその人のために祈ることである。

人が衰えて身体も動かせなくなった時、それでも人のために祈ることだけはできる。祈りしかできないが、祈りならできるともいえる。崇高な営みだ。平塚の丘の上にある日本最初のホスピス「ピースハウス」の壁にこんな詩があった。

最上の業

「この世の最上のわざは何。楽しい心で年をとり、
働きたいけれども休み、しゃべりたいけれども黙り、
失望しそうなときに希望し、従順に、平静に、

おのれの十字架をになう一。

若者が元気いっぱい神の道をあゆむのを見ても、ねたまず、
人のために働くよりも、けんきょに人の世話になり、
弱っても、もはや人のために役たたずとも、

親切で柔和であること一。

老いの重荷は神の贈物。

古びた心に、これで最後のみがきをかける。

まことのふるさとへ行くために一。

おのれをこの世につなぐくさりをすこしずつはずしていくのは、

祈り 瞑想 そして念ずる。この精神作用にはその対象や形から様々なものがある。その本質を探る前にいろいろの形を要約してみよう。

3-1 神との対話

カトリックでは祈りは神との対話であると教える。内なる神の声を聴く、自らの生き方に神はなんとおっしゃるか聴く。神は無言である。それでも聞き続けることが大切だ。日常それをつねに行えと教える。そのことによって信仰が活きる生き方ができる。信仰心の精髓が祈りにある。

祈りは宗教宗派が違って、信仰を持つものの基本として共通のものであろう。イスラムはそこに具体的な形を与えた。一日5回マッカの方向を向いて跪いて祈れとした。

3-2 無神論者の祈り 瞑想

禅宗の座禅はある意味で無神論の祈りだ。いまはそれに学んで欧米でも瞑想という形が盛んに行われている。自分の精神の中を見つめ、掘り下げていくのだ。精神の表層は外界によって揺れ動く、その下をどんどん掘り下げていくと阿頼耶識という領域にまで達することができる、と説く。禅の悟りはそこに得られる。そこまでいかななくても、瞑想によって落ち着いた生活態度を保ち続けることができる。

3-3 死を迎えるものの祈り

精神はやがて肉体を離れる。肉体がその寿命を迎える時、それとともに消滅してしまう道を歩む精神もあるが、望む精神は脱皮して5次元の世界に入ることになる。その分かれ道は重要だ。

祈りや瞑想は、おそらくその発生とともに人類が自ら生みだした精神作業である。人間の発生と共にといったのは、人間が精神を得たときと同じであるが、元来は精神の本質に付帯したものであったと思われるからだ。しかし人間が傲慢になり、自分の運命は自分が決めると思い上がった時、精神の肉体からの離脱をも、否定するようになり望まなくなった。

素朴な人間の精神は脱皮するのである。ただしその時に精神がどんな態度をとるかが問われる。やはり人間の人生で最大の冒険の時である。ぼん

やりしてはいけない。その瞬間を心から希求しなければならないのだ。

祈りとか瞑想 禅などといった精神のあり方は、その人生最後の時に持たなければならない態度の予行演習だと言える。その予行演習をやっている人間はその最後の瞬間もうまくいくであろう。無論それだけでなく人生を過ごす態度も変わってくる。「祈りのある人生」をとられる理由はそこにある。

無神論者はそのような切羽詰まった時しか祈らないのが普通だ。多神教に親しんでいるものの祈りもそれに近い。神は否定しないが積極的に向き合おうとはしない。自然の恵みへの感謝、共同体との連帯感の祭り。全人格をあげてということまではいかない。さらりとしている。

しかしそれでもその最後の時に祈る姿勢を自覚すれば、人生の大半を無神論で過ごしても最後の瞬間に脱皮を求め成功するかもしれない。

3-4 念じる

ベルグソンが「精神のエネルギー」の講演で取り上げたのは、愛する夫が戦場に亡くなった時その場のありさまをリアルに見ることができた妻の証言であった。当時第1次世界大戦がヨーロッパを巻き込み、このようなことが沢山あったのだ。イギリスの心霊協会が数百の事例を聞き取り調査したのである。

テレパシーという術語で名付けられたその現象は、その後は物理現象として実験室的に再現することを求めて、人間の主観を非科学的と排した実験研究がされたが、その研究はテレパシー発生の本質である切羽詰まった時の人間の念力といった精神の限界作用を無視したため全く成果を上げず、逆にテレパシーそのものを存在しないものとして否定した。しかしその事実があったことなのである。

3-5 念ずることの「気」の発生と伝播 テレパシー

現代科学で計測できず、心理学的客観的な実験で確認できないテレパシーはダークエネルギー波の伝播である可能性がある。ダークエネルギーは理論上波動であることはわかっているがその主体はわからず計測にかからないからだ。先に述べたように「気」はダークエネルギーの可能性があ

る。わからない同志をつなげるとテレパシーは「気」によって発動されて、その正体であるダークエネルギーの波動として伝播されて人間間の特別な意思伝達が可能なのだという仮説が成り立つ。

「気」を強力に発することのできる人は、特別の鍛錬を受けた人である。達人は「気」を発して人をなぎ倒すこともできる。普通の人にはできない。そうであれば、普通の人にはテレパシー発信などできそうにないが、ベルクソン時代の証言から見れば、普段そのような「気」の訓練を受けていない戦場での兵士も、死に臨み、愛する人に伝えたいと必死の思い（念力）を持ってしまった状況で、人に備わった「気」の発信が自然とできてしまったというふうを考えるほかない。

またその波動を受信した兵士の妻も「気」のことを知らぬ普通の人であるが、然し妻であったから発信者に特別に共感する気持ちをいただいた人であった。電波に取る受発信が成立するためには、電波の周波数を送受信で同調する必要がある。テレパシー通信にも人間はその波動に同調する能力が備わっているとしか考えられないのだ。

テレパシーの実験にはそのような特別な状況に人間を置き強い念力を起こさせ、一方で彼と特別な共感を持つ受信者がいなければ成立しないことになる。実験室的に人間の主観を抜きにした実験をしても成功しない筈である。

将来ダークエネルギーの解明が進み、今の電磁波と同じように自由に発受信できる時代が来れば、テレパシーも実験室でできるようになるであろう。その時人間と植物の対話も自由になる。

人間の精神の能力はこのようにまだまだ未開拓の世界があるのだ。ベルクソンは、人間はまだ進化の途上にあり、今は停滞しているがやがて次なる進化の段階に進むであろうと述べた。それは肉体的なものではありえず、精神の上で起きるしかなく、またその可能性は大きい。

その世界をイメージーションで展開してみると次のエピソードのようになる。それは空想の世界なのでお好きでない方は省略してください。

4、エピローグ

現在はダークマターについては、重力がありながら電気量を持たないということ、重力レンズ効果を使つての観測によって、宇宙における分布は銀河の分布に似ているということくらいしかわかっていない。またダークエネルギーは、宇宙空間に偏在していること、重力に対して斥力の作用があることくらいしかわかっていない。人間の科学は電気を梃子として発達したので、電気を持たないこれらの存在には当面歯が立たないのだ。

しかし今から数百年後の未来世紀になれば、人間は間違いなくダークマター、ダークエネルギーに関するまともな科学を得ることになるだろう。なぜならそれが目下人間科学の最大のフロンティアであり、そこに人間の叡知が集中するからだ。その科学は宇宙探査と宇宙研究によってのみ発展すると考えられるがこれから人類の宇宙探索能力は加速的に進むからだ。

その本質が解明されると、いま手にしている物質と同じように、それらの解析も進み、合成もできるようになっているだろう。そうなれば、今は全く分からない人間の精神の構造や、肉体との結合の仕組みもわかってくるに違いない。

そうなった時に、予測される人間に対する大きな変化の事態は、人間精神の生前離脱が可能になることだ。いまは、精神が肉体の束縛を解き放つて自由になるのは、肉体の死を迎える時だけだ。だからその先のことを今は誰も知らない。これまでは極めて限られた人間が臨死体験で、離脱経験を報告しているが、共同体験にはならないし、追試ができない。

だからそれがだれにでも可能になるということは、想像を絶する事態なのだが、あえてその先を想像してみよう。

生前離脱が可能になればどうなるのか。

それを考えるためにもう一度これまで述べた仮説に戻らなければならない。すなわち人間の精神はダークマターとダークエネルギーで出来ているという仮説だ。この精神を得た人間は、現実にはないことも想像する力を持つこととなった。イマジネーションだ。この想像力は時間、空間を自由

に飛び回る。それは当たり前のように思ってしまうが、実はそれは精神がダークマターとダークエネルギーで出来ているからなのだとすると怪訝な顔をされるだろう。しかしダークマターとダークエネルギーこそは5次元の運動領域を持っているからなのだと説明すれば、あるいはと納得いただけるのではないか。5次元とは我々が体験する3次元の世界に時間軸と重力軸を加えたものだ。そしてその時間軸と重力軸を自由に動けるということが、ダークマターとダークエネルギーからなる精神の特徴なのだ。

しかし肉体の制約に縛られている限り、自由な想像と言っても人間世界の範囲に限られてしまう。それ以上は人智が及ばないからだ。

それが生きている肉体から離脱できれば、足元から宇宙に接続している五次元の世界に飛び立つことになる。そして時間軸と重力軸を自由に動くならば、130億光年もある広大な宇宙を瞬時にくまなく体験できるのだ。

そこで見えてくる世界は、今我々が望遠鏡で覗く物質的宇宙だけではないだろう。なぜなら卒業した人間の精神群がそこに向かって旅立っているはずだからだ。過去からの、あらゆる精神群が満ち満ちて、今を生きている世界、言い換えれば、神の世界というほかない世界だ。

肉体という素晴らしい装置に寄生していた精神体は、その世界に適応するにはある変成養生あるいは訓練の時間が必要なのかもしれない。ゲーテのメタモルフォーゼ、ファウストの最終場面に書かれた姿がそれを予想しているのだ。その体験を経験した人間は間違いなく異質な成長を達成するだろう。

生前離脱が可能になった時代になれば、教育というのも一変する。人間は生まれてある教育期間を経て精神が成熟したら、一定時間、精神の生前離脱の修養が課せられるようになる。その準備と実施の期間、肉体は安全に見守られている。離脱精神の修養体験が終われば、再び肉体に戻るが、五次元の世界での経験は時間軸が自由になるので戻るまでの現実社会での時間はほんの瞬く間で終わる。再び健康な肉体とともに人生を過ごすことは、精神の成長にはかけがえのない重要性を持っているからだ。

人間の進化はそのように起きるのだ。

私の友人のご子息である小野雅裕さんは米国 NASA の JPL 研究所で宇宙探査に携わっておられ、余暇に「宇宙に命はあるか」という面白い本を書かれた。次のように語られている。銀河には数千億の惑星がある。生命を生みだせる条件のある惑星も限りなくあるわけだから、そこには地球より先進的な文明をもつ星が必ずある。彼らは地球から発せられた電波を受信し地球文明を発見し、それへのレスポンスを出してくれているかも知れない。しかし、それは何光年も遠いところにあることだから、地球人がそれを受信するには 1000 年 2000 年かかるとみてもおかしくない。問題は、その時地球文明が崩壊してしまっていないかだ、戦争や地球温暖化を起こした人類がそれを解決できなければ人類は消滅しているかもしれない。

彼は人類がもつイマジネーションの力で突き動かされる限り、きっと宇宙文明の仲間入りを成し遂げるだろうと述べている。

私も同意見だ。人間が今はダークと呼んでいるものが、明るい世界に持ち出されたとき、人間の進化は、精神の自由離脱能力を得る。そして必須の学習が五次元の宇宙世界を体験学習することになった時、あらゆるエゴからも解放され、やっと動物の世界から人間の純粹世界である高貴な愛の精神世界を得る。地球の崩壊の危険はその時解消する。

広い宇宙の生命進化の姿を想像すると、地球では宇宙から来たいのちの種が物質に宿り、その制約と闘いながら進化してきたのだが、それとは違うルートがあってもおかしくない。それはダークマター・ダークエネルギーが、物質の介在を経ずして「いのち」を生み出すケースだ。つまり人間が 100 万年かかって成し遂げた進化、すなわち精神の世界を、初めから純粹な形で実現している世界がこの広い宇宙にあるかもしれない。彼らは五次元の存在だから時間空間を自由に移動する。物質的エネルギーの補給は必要としないから、資源の獲得欲求はない、侵略など無縁だ。時に地球をも、楽しみで見学に来ることもある。それが UFO なのかもしれない。

地球人の進化はまどろっこいし、次の進化までには、まだ数百年かかるかもしれないが、やがて小野さんの言う「ホモ・アストロルム」への仲間入りができるという夢がある。

それが実現することを願ってやまない。

<参考にした本>

- 1) 宇宙のダークエネルギー 「未知なる力」の謎を解く 土居守 松原隆彦
光文社新書 2011-9-30
- 2) 気とは何か 人体が発するエネルギー 湯浅泰雄 NHK ブックス 1991-
1-20
- 3) 気 修行 身体 湯浅泰雄 平河出版社 1986-11-25
- 4) 気の世界 東大公開講座 東大出版会 1990-2-28
- 5) 気で観る人体 経絡とツボのネットワーク 池上正治 講談社現代文庫
1992-12-20
- 6) 病を治す哲学 伝説的医書「黄帝内経」の驚異 青島大明 講談社新書
2009-5-20
- 7) 意識 情報 エネルギー 医学—スピリチュアル健康学への道 奥健夫
エンタプライズ出版部 2007/3/24
- 8) 祈り 越前喜六編著 教友社 2014-12-3
- 9) 随想集「人生の秋に」ヘルマン・ホイヴェルス著 春秋社 1969-11-25
- 10) ゲーテ「ファウスト」第五幕 深山の峡谷 柴田翔訳 1999/9/27
- 11) 彗星パンスペルミア 生命の源を宇宙に探す チャンドラ・ウィックマ
シング著 松井孝典監修 所源亮訳 恒星社厚生閣 2017/5/1
- 12) 生命・DNA は宇宙からやってきた フレッド・ホイル、チャンドラ・ウイ
ックマシング著 茂木健一郎監訳 徳間書店 2010-8-31
- 13) 宇宙に命はあるか 人類が旅した一千億分の八 小野雅裕 S Bクリエイ
ティブ社 2018-2-15